

J A めむろ青年部・女性部 海外視察研修

第 23 回 海外視察研修報告書

令和 8 年 1 月 13 日～1 月 22 日

J A めむろ青年部・女性部

目 次

はじめに 第23回 JAめむろ青年部・女性部 海外視察研修団 団長 中村 佳貴	1
参加者名簿	3
行 程 表	4
地 図	5

<視察研修先>

1. CLAAS (クラス)	6
2. AMAZONE (アマゾーネ)	8
3. GRIMME (グリメ)	10
4. Kastanie Hoeve (カスタニュホーフエ牧場)	12
5. Wageningen University & Research (ワーゲニンゲン大学)	14
6. Solana HOLLAND (ソラナ ホランド)	16
7. NAJK (オランダ農業青年委員会)	18
8. TOMATO WORLD (トマトワールド)	20

<団員寄稿>

中村 佳貴	22
沖元 慶大	24
竹内 雅佳	26
中村 知史	27
出口 晴基	29
小林 幸星	31
旅を終えて	33
編集後記	37

はじめに

第 23 回 J A めむろ青年部・女性部 海外視察研修
団長 中村 佳貴

今回の研修は、海外の情勢や円安の状況により女性部からの参加は無く、青年部 6 名参加のもと視察先の選定をおこないました。研修の目的は、農業者として、そして農業経営の一角を担う我々としても先行きが見えず、従来の変化に対応できる柔軟性を持つ必要性や農業の見える化に加え、農業 DX による生産から流通までのデータ化、有機栽培、温暖化による適温作物の変化や品目数の拡大など多角的な問題や課題が山積されています。そのため、生産者として芽室農業へ寄与できるよう知見を広げることを目的として、気象条件が近く、平均栽培面積も同じ規模でありながら、農業輸出額の世界トップレベルでもあるドイツ・オランダを選定し、団員の要望が多かった農場や機械メーカーなど 1 月 13 日から 9 日間に渡り視察して参りました。



ドイツでは、CLAAS 社・AMAZONE 社・GRIMME 社の農業機械メーカー 3 社を視察しました。後述の個人レポートでも触れますが、3 社とも日本の機械メーカーでは見られないような合理的な工夫が随所に見られ、部品製造は安い外注ではなく、少し割高でも可能な限り自社でおこなうよう徹底されており、ドイツ特有の自国産の物を使う意識や、自社で用意することにより品質や部品納期の事故が無いように作られていることもドイツの機械メーカーは最も高品質とされている要因の 1 つと再認識致しました。

オランダでは、ワーゲニンゲン大学やトマトワールドの施設園芸、カスタニエホーフエ牧場、Solana グループのオランダ型農業、NAJK での農業青年の思いを学びました。オランダの農業はワーゲニンゲン大学による最先端の研究により、干拓した土地や狭い国土に関わらず世界第 2 位の農業輸出額となるほど単位面積あたりの農産物収量性を上げる技術を持っています。しかし、オランダの食料自給率は充分すぎるということで、現地では数年前から収量性を上げることもより政策として環境負荷を低減することに取り組み始め、国民も環境保護に対

する意識が高いとのことでした。国として自国農業に支援することは少なく、使用できる農薬の種類や二酸化炭素や窒素を低減する政策が4年ごとに変わるといことで、現地の農業者は不満を持っている部分もありましたが、カーボンクレジットの枠を企業と売買することで利益を上げている点など、オランダ農業は日本農業の数歩先を行っている印象を受けました。2カ国ともあらゆる点で見応えがあり、生産者と消費者の両面から刺激を得ることができました。

今回の研修で、我々団員全員が芽室町から国外へ足を向けることにより得られた知識や風土など数多くの刺激に触れられたことは、今後の営農につながる貴重な体験であり、参加者6名全員が無事に帰町し海外視察研修を終えたことをここに報告いたします。

最後に、この度の研修に際し多大なるご理解、ご協力をいただいたJAめむろ、芽室町役場、並びに青年部・女性部、そして各関係機関の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、今後多くの青年部員、女性部員が海外視察研修に積極的に参加されますことに期待をいたします。

第 23 回 JA めむろ青年部・女性部海外視察研修参加者名簿

団 長：中村 佳貴

副団長：沖元 慶大

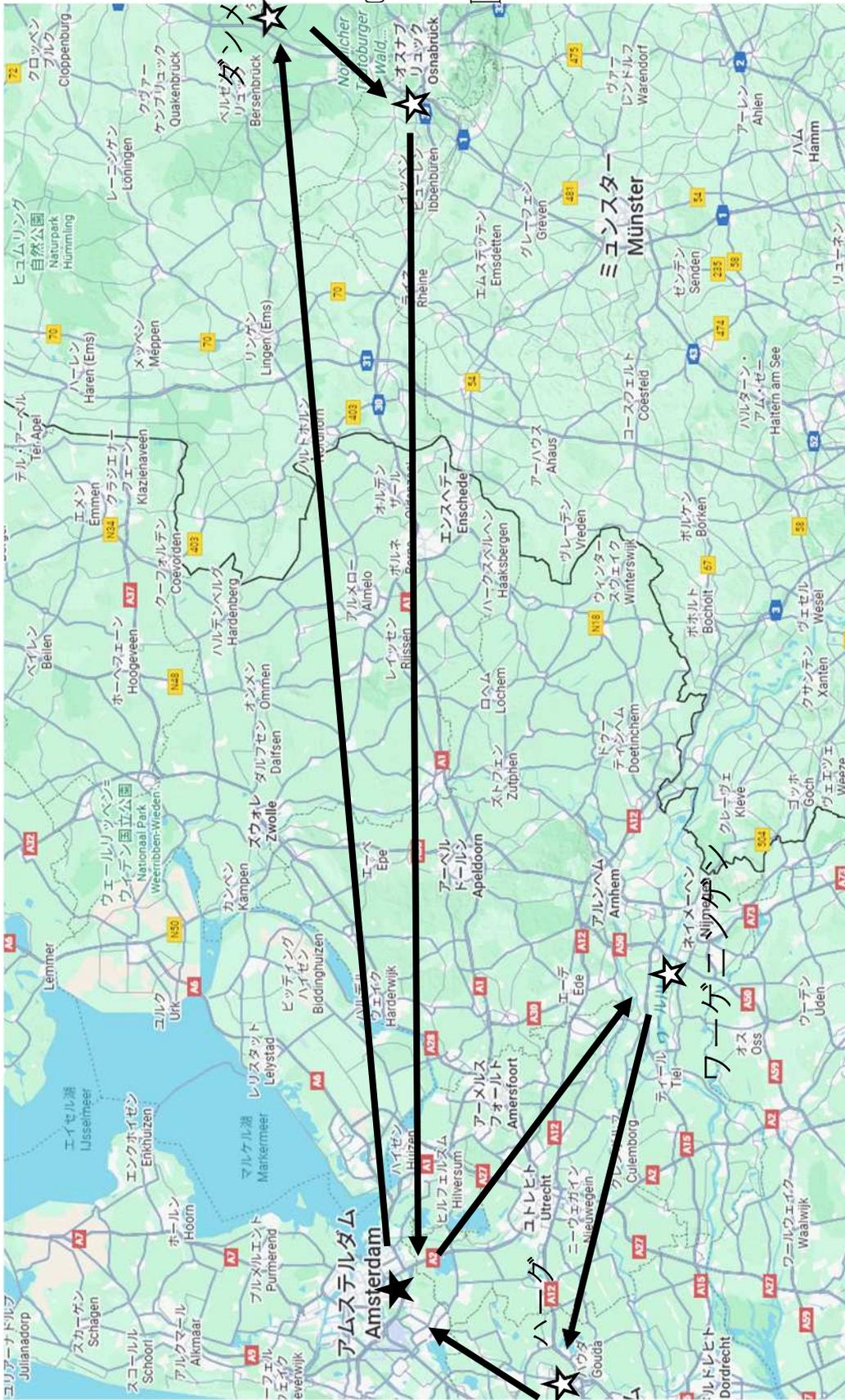
竹内 雅佳

氏名	農事組合	担当
中村 佳貴	北明	団長
沖元 慶大	共栄	副団長（渉外）
竹内 雅佳	上芽室	副団長（広報）
中村 知史	丸山	渉外
出口 晴基	渋山	広報
小林 幸星	弥生	厚生

行 程 表

日次	日付	都 市 名	発着	交通機関	現地時間	行程	朝	昼	夕
1	1月13日	火	羽田空港 成田空港 蒲田周辺ホテル	発着 港発着 港発着	JL570 電車等	10:20 国内線にて羽田空港へ 12:05 到着後、 13:30 電車等にて都内ホテルへ移動 15:00 【ホテルルートイン東京蒲田-あやめ橋-泊】	-	-	-
2	1月14日	水	都内ホテル 羽田空港 成田空港 アムステルダム空港	発着 港発着 港発着 港発着	電車等 リムジンバス KL862 専用車	8:30 朝食後、羽田空港へ移動 9:15 羽田空港からリムジンバスにて成田空港へ 10:35 到着後、出国手続き 13:35 KLMオランダ航空にてアムステルダムへ(14:05) 19:40 到着後、入国手続き ホテルへ 21:00 オランダ【アムステルダム空港周辺 泊】	ホテル	機内食	○
3	1月15日	木	ダ ン メ	着 発	専用車	9:00 オスナブリュックへ(240km/約3時間) 13:30 ①「GRIMME社」馬鈴しょ農機視察 3時間 https://grimme.com/en 17:00 ドイツ【オスナブリュック 泊】	ホテル	○	○
4	1月16日	金	オスナブリュック	着 発	専用車	9:30 視察先へ移動 10:00 ②「AMAZONE社」馬鈴しょ農機視察 2時間 https://amazone.net/en 15:00 ③「サステナブル農業システム企業」NEXAT社 2時間 https://www.nexat.de/en/ 18:00 ドイツ【オスナブリュック 泊】	ホテル	○	○
5	1月17日	土	オスナブリュック	着 発	専用車	7:30 朝食後、アムステルダムへ(240km/約3時間) 10:00 ④「SOLANA HOLLAND」ジャガイモ育種・研究視察 https://solanaholland.nl/en/ 14:30 ⑤「ファーマーズマーケット」視察 「Lindengracht Market」 17:30 【アムステルダム市内 泊】	ホテル	○	○
6	1月18日	日	アムステルダム	着 発	専用車	9:00 アムステルダム郊外へ移動 10:00 ⑥「チーズ工房」視察 http://www.zuivelboerderijpennings.nl/ 14:30 アムステルダム市内観光 アムステルダム国立美術館 ファン・ゴッホ美術館 17:30 【アムステルダム市内 泊】	ホテル	○	○
7	1月19日	月	ワーゲニンゲン	着 発	専用車	8:30 朝食後、ワーゲニンゲン大学へ(約1時間30分) 10:00 ⑦「ワーゲニンゲン大学」視察研修(5時間予定) オランダ農業及び施設園芸についてレクチャー ICT・ロボティクス部門についてレクチャー 研究施設及びワーゲニンゲン遺伝子研究センター 18:00 【アムステルダム市内 泊】	ホテル	○	○
8	1月20日	火	アムステルダム	着 発	専用車	8:30 朝食後、ハーグへ(約1時間30分) 10:00 ⑧「オランダ農業団体」視察「LTOオランダ」2時間 http://www.lto.nl/ 14:30 ⑨「ロボティクス農業」視察「トマトワールド」2時間 http://tomatoworld.nl/ 16:30 【アムステルダム市内 泊】	ホテル	○	○
9	1月21日	水	アムステルダム	着 発	専用車	10:00 ホテル朝食後、空港へ(アシスタント同行) 11:20 空港チェックイン、出国手続き(3時間前) 14:20 KLMオランダ航空直行便にて成田空港へ 【機内 泊】	ホテル	機内食	
10	1月22日	木	成田空港 成田空港 羽田空港	着 発 港発着 港発着	リムジンバス JL579	11:45 到着後、入国手続き 13:00 リムジンバスにて羽田空港へ移動 14:30 17:30 国内線にて羽田空港へ 19:10 到着後、解散	機内食		-

地



視察研修先

1. CLAAS（クラス）

1月15日に視察したドイツのハーゼウインゲルに本社を置くCLAAS社は、ドイツを代表する農業機械メーカーであり、特にコンバインハーベスター分野で世界的に高い評価を受けている企業である。1913年にアウグスト・クラスによって創業され、100年以上にわたり家族経営を維持しながら成長を続けてきた。



CLAAS社は創業当初、脱穀機の製造から事業を開始したが、農業の機械化が進展する中でコンバインハーベスターの開発に注力し、業界をリードする存在となった。現在ではコンバインに加え、トラクター、フォレージハーベスター、農業用デジタルシステムなど幅広い製品を展開し、大規模農業から多様な作業形態に対応している。高い作業効率、耐久性、操作性を重視した設計は世界中の農家から支持されている。

ハーゼウインゲル工場には研究開発施設や試験圃場が併設されており、実際の農作業条件を想定した製品開発がおこなわれている。また、近年はGPSやデータ解析を活用した精密農業や自動化技術にも力を入れ、持続可能な農業の実現に貢献している。CLAAS社はグローバル企業でありながら、創業地ハーゼウインゲルに根ざした現場重視の企業文化を大切にし、地域とともに発展してきた企業である。

研修では、まずショールーム内で会社概要の説明を受け、コンバインやトラクターなどの展示機械を見学した。その後、敷地内の工場へ移動しコンバインやフォレージハーベスターの生産ラインを見学した。工場内はロボットによるデータ管理化がなされており、作業員を減らすことによる人件費の削減がなされていた。また、生産されている作業機の部品をすべて工場内で製造することによる製品品質の均一化や流通コストの削減などの企業努力もみられ、ドイツの工業力の高さを再認識した。



2. AMAZONE (アマゾーネ)

1月16日に視察したハスベルゲンに本社を置くAMAZONE社は、ドイツを代表する農業機械メーカーであり、施肥機、播種機、耕起機を中心とした専門性の高い製品で世界的に知られている。1883年に創業された同社は、140年近い歴史を持つ家族経営企業で、現在も創業地に本社機能を置きながら事業を展開している。



AMAZONE社は創業当初、穀物洗浄機の製造からスタートし、農業の機械化が進む中で施肥機や播種機分野へと事業を拡大してきた。特に肥料散布機においては、高精度かつ均一な散布性能で高い評価を確立し、作業効率の向上と肥料使用量の最適化を実現している。これにより、農家の生産性向上だけでなく、環境負荷の低減にも貢献してきた。

近年では、GPSやセンサー、データ解析技術を活用した精密農業への取り組みを強化しており、機械単体の性能向上に加え、可変施肥や作業データ管理などのデジタルソリューションを提供し、持続可能で効率的な農業経営を支援している。これらの技術は、ハスベルゲン周辺の試験圃場や実証施設で検証され、実際の農業現場に即した形で製品化されている。

今回の研修では、はじめに会社内オフィスにて会社の歴史や概要などの説明を受け、その後展示機械の見学をしながら製品のライン工場へと移動した。ライン工場では肥料散布機の組み立てが主におこなわれており、こちらの工場でもCLAAS社と同様のロボットによる製品パーツのデータ管理化がなされていた。また、工場見学の後に会社の研究圃場にて自走スプレーヤーの実演を見学した。見学したスプレーヤーは4000Lタンクの36m竿という大型のもので、300haほどの面積を管理する想定で設計されており、高速かつ正確な作業を可能にしている。センサーによる竿の安定性が確保されており、実際の圃場作業での最適化がなされていると感じた。



3. GRIMME (グリメ)

1月16日に視察した GRIMME 社では、芋収穫機の性能や操作性について学ぶことができ、農家として現場で役立つ視点を多く得ることができた。GRIMME の収穫機は、土壌からじゃがいもを傷つけずに掘り出す工夫がされており、振動コンベアやローラーによって収穫物の損傷を最小限に抑える設計になっている。実際に操作体験を



通じて、掘り取り速度や搬送の滑らかさ、土の落とし方など、現場での作業効率や収穫物の品質に直結する部分を実感できた。

工場見学では、組み立てラインや部品加工、塗装工程などを見学した。特に印象的だったのは、完成機の精密な組み立てと品質検査の徹底ぶりである。各部品が順序よく組み合わされる過程や、テスト工程での収穫シミュレーションは、農家として求められる耐久性や作業効率に直結していることがよくわかった。塗装や部品加工の丁寧さは、屋外で長期間使用する農機にとって重要であり、このようなこだわりが現場での安心感につながることを理解した。

今回の研修を通じて、単に機械の性能を知るだけでなく、農業現場での使い勝手や作業者の負担軽減といった視点が製品開発に反映されていることを学んだ。今後は、この経験を自分の農作業に活かし、収穫効率を高めつつ、作業の安全性と収穫物の品質を両立させる方法について、さらに理解を深めたいと考える。

また、顧客の使用環境を起点とした製品開発と、現場主体の改善活動が高い信頼性につながっていることを学んだ。



4. Kastanie Hoeve (カスタニエ ホーフエ牧場)

1月18日に視察したカスタニエホーフエ牧場は、アムステルダム近郊に位置する家族経営型の牧場であり、持続可能な酪農経営と高付加価値化を実践している点が大きな特徴である。同牧場では、乳牛の飼養から搾乳、加工、販売までを一貫しておこない、地域に根ざした循環型農業モデルを確立している。大量生産を目的とするのではなく、品質と消費者との距離の近さを重視した経営がおこなわれている。



牧場では、牛の健康と福祉を最優先にした飼養管理が徹底されている。牛舎は採光や通気性に配慮した設計となっており、牛が自由に行動できる環境が整えられている。また、飼料については自家生産牧草を中心に構成され、輸入飼料への依存を抑えることで、コスト削減と環境負荷の軽減を両立しており、家畜の健康状態は日常的に観察・記録され、疾病予防を重視した管理体制が取られている。

研修では、牧場の経営方針や生産工程について詳細な説明を受けた。特に印象的だったのは、加工・直売による付加価値創出の取り組みである。生乳はチーズやヨーグルトなどの乳製品に加工され、牧場併設の直売所や地域市場を通じて販売されている。これにより価格決定権を生産者自身が持ち、安定した経営を実現している。

さらに、カスタニエホーフエ牧場では、消費者との交流を重視した活動もおこなわれている。牧場見学や教育プログラムを通じて、牧場の現場や食の大切さを伝えることで、地域社会からの理解と信頼を高めている。研修を通じて、酪農経営の持続性は生産技術だけでなく、社会との関係構築によって支えられていることを学んだ。

今回の研修から、規模拡大だけを追求するのではなく、地域資源を活かし、付加価値と信頼を積み重ねる経営の重要性を強く実感した。また、酪農経営でも技術導入だけでなく、環境配慮と経営のバランスを取ることが重要であるということを知ることができた。



5. Wageningen University & Research

(ワーゲニンゲン大学)

1月19日にオランダ中部にあるワーゲニンゲン大学（Wageningen University & Research）を訪問し、同大学の教育・研究体制や研究環境について概要を学んだ。ワーゲニンゲン大学は、農業、食品、環境分野において世界的に高い評価を受けており、持続可能な社会の実現を目標に、教育と研究を一体的



に進めている点が大きな特徴である。オランダの「フードバレー (Food Valley)」と呼ばれる食品・農業技術産業集積地に位置し、キャンパス周辺には数多くの農業研究機関や関連企業が集まっている。このため、ワーゲニンゲン大学は産官学の拠点として、作物の品種改良、持続可能な農業技術、食料安全保障、気候変動対策などで世界をリードする存在となっている。

研修中は大学の概要説明を受けたほか、キャンパス内の研究施設や実験設備の見学をおこなった。最新の研究設備が整えられており、基礎研究から応用研究まで幅広い分野に対応していることが理解でき、大学と研究機関が連携する体制により、研究成果が社会や産業へ還元される仕組みが構築されている点が印象的であった。

また、ワーゲニンゲン大学には100か国を超える留学生や研究者が在籍しており、英語を共通言語とした国際的な研究交流が活発におこなわれている。キャンパス内の雰囲気からも、多様な文化や価値観を尊重する姿勢が感じられた。

本研修を通してワーゲニンゲン大学が世界的な課題である食料問題や環境問題に対し、研究と実践の両面から取り組んでいる大学であることを理解した。今回の研修で得た知見は、今後の学習や将来を考える上での視野を広げる貴重な機会となった。

さらに、施設内建物全てに帯水層熱交換システムを使用しており夏は涼しく、冬は暖房機能を備え、それにより少しでも化石燃料の使用を抑えている。



6. Solana HOLLAND (ソラナ ホランド)

1月19日に視察した Solana HOLLAND では、オランダの農業関連施設において、施設栽培や農業生産システムに関する講義を受け、オランダ農業の現状や先進的な取り組みについて学んだ。研修は主に室内でおこなわれ、資料や映像を用いた講義を通して、科学的根拠に基づく農業経営の考え方について理解を深めた。



研修ではまず、オランダ農業情勢について説明があり、国土が限られている中でも、高い生産性と輸出力を誇る農業国として発展してきた背景を学んだ。効率化と付加価値の向上を重視し、技術力や研究成果を積極的に農業現場へ導入している点がオランダ農業の大きな特徴であると感じた。

続いて、温室栽培における環境制御技術や、種芋（シードポテト）の生産と管理について詳しい説明を受けた。オランダでは、じゃがいも生産の基盤として高品質な種芋の育成が重視されており、病害のない健全な種芋を供給するため、厳格な検査や管理体制が整えられている。温度や湿度、光条件を適切に管理することで安定した発芽と生育を可能にしていることを学んだ。

さらに、省エネルギー技術や水資源の再利用など環境負荷を抑えた持続可能な農業への取り組みについても紹介された。生産効率と環境配慮を両立させる姿勢は今後の農業の在り方を考える上で重要であると感じた。

本研修を通して、オランダの農業が情勢を踏まえつつ、技術とデータを活用して体系的に発展していることを理解した。室内中心の研修ではあったが、農業を産業として捉える視点を学ぶ貴重な機会となった。



7. NAJK（オランダ農業青年委員会）

1月20日に視察した、NAJK（Nederlandse Agrarische Jongeren Kontakt）は、35歳以下の若手農業者および農業に関心を持つ若者によって構成される全国組織であり、オランダ農業の次世代を担う人材育成と政策提言を主な目的として活動している。NAJKは生産者の立場から農業政策、環境問題、経営継承、技術革新など幅広いテーマに取り組み、政府や関係機関と対話をおこなうことで、若手農業者の声を農政に反映させる重要な役割を果たしている。



NAJKの特徴は、若手農業者自身が主体となって組織運営や意思決定をおこなっている点である。全国組織の下に地域支部があり、現場の課題を地域レベルで議論し、それを全国的な政策提言へとつなげる仕組みが確立されている。また、農業だけでなく、環境保全、再生可能エネルギー、食料安全保障といった社会的課題に対しても積極的に関与し、農業を社会の中でどのように位置づけるかを常に意識した活動がおこなわれている。

研修では、NAJKの組織構造や活動内容に加え、印象的だったのは環境規制や窒素排出削減政策といった厳しい条件の中でも若者が農業を「魅力ある職業」として捉え続けるための仕組みづくりが重視されている点である。教育・研修プログラムを通じて、経営力やリーダーシップを育成すると同時に、農業者同士のネットワーク形成を強化している。また、国際的な視点も重視しており、EUレベルでの政策議論や海外の若手農業者団体との交流にも積極的である。これにより、国内課題を国際的な文脈で捉え、長期的な農業の方向性を考える姿勢が育まれている。

今回の研修を通じて、オランダ農業の持続性は技術や資本だけでなく、若手農業者が主体的に発言し、社会と対話する力に支えられていることを実感した。NAJKの取り組みは、日本における若手農業者組織や人材育成の在り方を考える上でとても重要なことだと学んだ。



8. TOMATO WORLD (トマト ワールド)

1月20日に視察した、オランダの「TOMATO WORLD」は、世界有数の施設園芸地帯である西部フリースラント地域（ウェストラント）に位置する、トマト栽培と最先端農業技術を学ぶ体験型施設である。ここでは、オランダが強みとする高効率・高付加価値型農業を実際の温室や展示を通じて体系的に理解することができる。TOMATO WORLD は単なる展示施設ではなく生産者・研究機関・企業が連携し、持続可能な農業モデルを世界に発信する拠点としての役割を担っている。



施設内では、ハイテク温室におけるトマト栽培の一連の工程を学ぶことができる。環境制御技術により、温度・湿度・CO₂濃度・光量が精密に管理され、天候に左右されない安定生産が実現されている点が大きな特徴である。また、水耕栽培や養液循環システムにより、水や肥料の使用量を最小限に抑えつつ、高い収量と品質を両立している。病虫害防除においても化学農薬に依存せず、生物的防除を中心とした IPM（総合的病虫害管理）が導入されており、環境負荷の低減が徹底されている。

研修を通じて特に印象的だったのは、「データに基づく農業経営」の考え方である。センサーや AI を活用し、生育状況や収量、エネルギー使用量を常時可視化することで、経験や勘に頼らない合理的な意思決定がおこなわれていた。また、生産だけでなく、流通・マーケティング・ブランド戦略まで含めた視点で農業が捉えられており、農業を一つの産業として成立させる仕組みを学んだ。

今回の研修から、オランダ農業の強さは技術力だけでなく、知識共有や連携体制、長期的なビジョンに基づく経営姿勢にあると感じた。TOMATO WORLD は、これからの持続可能な農業の在り方を示す実践的な学びの場であった。



団員寄稿

海外視察研修を終えて

中村 佳貴

まず初めに、令和7年度JAめむろ青年部・女性部海外視察研修にご支援いただきました、JAめむろをはじめ、芽室町役場、関係各所に心より御礼申し上げます。

本研修では、ドイツおよびオランダの農業関連の現場を視察し、現地での農業情勢や国としての農業政策、持続可能な農業や先進技術の活用について学びました。限られた資源や国土の中で高い生産性を実現している両国から、日本農業の今後を考える上で多くの学びを得ることができました。



ドイツでは、CLAAS社・AMAZONE社・GRIMME社の農業機械メーカー3社を視察しました。3社とも共通して溶接作業や組み上げになるべく人を使わないようにロボット機械を導入して人員の削減を進めており、塗装作業は液槽にドブ付けをして最終的には電磁石の原理を利用して、高精度で高強度な塗装をするなど日本の機械メーカーでは見られないような合理的な工夫が随所に見られました。また、3社とも部品製造は安い外注ではなく、少し割高でも可能な限り自社でおこなうように徹底されており、ドイツ特有の自国産の物を使う意識を感じられました。自社で用意することにより品質や部品納期の事故が無いように作られていることもドイツの機械メーカーは最も高品質と言われている要因の1つと再認識致しました。

オランダでは、ワーゲニンゲン大学やトマトワールドの施設園芸、カスタニエホーフエ牧場やSlanaグループのオランダ型農業、NAJKでの農業青年の思いを学びました。オランダの農業を学びに行った当初の目的は、狭い国土に関わらず世界第2位の農業輸出額という点で、面積あたりの農産物収量性を上げる技術を学びたいと思っておりました。ですが、オランダの食料自給率は充分すぎると

ということで、現地では5年ほど前から収量性を上げることも政策として環境負荷を低減することに取り組み始めているとのことでした。国として自国農業に支援することは少なく、使用できる農薬の種類や二酸化炭素や窒素を低減する政策が4年ごとに変わるということで、現地の農業者も不満を持っている部分もありましたが、カーボンクレジットの枠を企業と売買することで利益を上げている点など、オランダ農業は日本農業の数歩先を進んでいる印象を受けました。

本研修を通じて、農業の発展には技術だけでなく、政策、教育、消費者意識との連携が不可欠であることを学びました。今後は、これらの学びを日本農業に活かし、持続可能な農業の実現に貢献していきたいと思います。

海外視察研修を終えて

沖元 慶大

今回の海外視察研修は1月13日から22日の日程でドイツとオランダに行きました。私が今回海外視察に参加した理由といたしまして、農業の見聞を広げるだけではなく、海外の文化や価値観に触れることで物事の捉え方の多様化ができたらと考えたからです。

初めにドイツでは、CLAAS 社、AMAZONE 社、GRIMME 社で研修をしました。3社とも、自社製品の部品を多く取り扱うことにより、適正在庫と部品供給の円滑化をしています。また、組み立てラインを効率よく配置し、一人当たり週36時間の就労時間の中、3交代制で24時間工場を稼働しているとのこと。さらにドイツの教育システムは日本と異なり、基礎学校（10歳程度）修了後、生徒は学力や適性、本人および保護者の意向に応じて、基幹学校（工場労働者など）、実科学校（公務員など）、ギムナジウム（大学進学）などに進学するという、早期の進路分化の特徴があります。特に、企業での実務訓練と職業学校での教育を並行しておこなうデュアルシステムは、産業界と教育機関の強い連携により、高い実践力を備えた人材育成を可能としています。グリメ社では無給ではありますが、誰でも約3年の職業訓練の後、一定以上の技術があれば就職できる研修制度もあります。



次にオランダでは、カスタニューホーフエ牧場、ワーゲニンゲン大学、Solana HOLLAND、NAJK（オランダ農業青年委員会）を研修しました。研修では環境問題、農政についての話が多くありました。オランダの農業は、政治との密接な連携のもとで発展してきた点に大きな特徴があります。国土が狭く、人口密度が高いという条件の中で、政府は早くから農業を戦略産業と位置づけ、研究機関・教育機関・農業者・企業を一体的に支援する政策を展開してきました。しかし、窒素（牛のげっぶなど）の排出が問題となっており、排出を抑制して自然環境を保護する政策も取っています。この政策は、生物多様性の保全や環境負荷低減を目的とする一方で、家畜頭数削減や農場買い取りなどを伴うため、農業経営や地域社会に大きな影響を及ぼしています。また、農政の変化も多く対応に追われると

も研修で伺いました。そのような環境の中で、NAJKは若手農業者の立場から農業政策に参画する組織として、ボトムアップ型の政策提言をおこなっています。地域ごとの青年農業者ネットワークを通じて課題や意見を収集し、委員会内で議論を重ね、政府や議会、関係機関に対して公式な提言として提示する仕組みが整えられています。また、環境規制や窒素政策など社会的影響の大きい課題に対しても、単なる反対にとどまらず、現実的かつ段階的な代替案を示す姿勢が特徴であり、持続可能な農業政策の構築を目指していると伺いました。

今回の研修を通して、近年生産コストが高くなっていく中で、より高性能になっていく農業機械、無人作業機など日々進化していく中で、自分の経営に何が必要なのか見極めるためにも多くのアンテナを張る必要性を感じました。また、農業政策においても日本の青年部にもポリシーブックというボトムアップ型の政策提言があります。厳しい農業環境を少しでも良くしていくためにも青年部活動を通してたくさんのことを学び、ポリシーブックを使いながら持続可能な農業を目指していくことが大切だと改めて感じました。

最後に、今回の海外視察研修に参加させていただくにあたり、JAめむろ並びに芽室町役場や各関係機関の皆様にはご理解と多くのご協力をいただき、誠にありがとうございました。

海外視察研修を終えて

竹内 雅佳

まず初めに、JAめむろ青年部・女性部海外視察研修を無事終え、JAめむろ・芽室町役場・農協観光をはじめ関係各所に重ねてお礼申し上げます。

本研修では、ドイツおよびオランダの農業現場を視察し、持続可能な農業経営と先進技術の活用について学ぶことができました。ドイツ、オランダいずれも限られた資源の中で高い生産性を実現しており、日本農業を考える上で多くの示唆を得ることができました。

ドイツでは、環境保全を重視した農業政策とそれに基づく農家の取り組みを中心に学びました。視察した農場では、化学肥料や農薬の使用を抑え、輪作や緑肥を取り入れた土づくりが実践されていました。また、家畜飼養においても動物福祉への配慮が徹底されており、消費者の信頼を重視した生産体制が印象的でした。さらに、国の補助制度やEUの共通農業政策が農家経営を支えている点から、政策と現場の結びつきの重要性を強く感じました。

オランダでは、施設園芸の高度化が際立っており、大規模な温室では環境制御システムにより温度・湿度・CO₂濃度が管理され、少ない資源で高収量を実現していました。また、大学や研究機関、民間企業、農家が密接に連携し、研究成果を迅速に現場へ反映させる体制が整っていることも大きな強みであると感じました。輸出を前提とした品質管理や物流システムの確立により、国際競争力を高めている点も印象に残りました。

本研修を通じて、農業の発展には技術だけでなく、政策、教育、消費者意識との連携が不可欠であることを学ぶことができました。今後は、この海外視察研修での学びを日本の農業に活かし、持続可能な農業の実現に貢献していきたいです。



海外視察研修を終えて

中村 知史

まず初めに、第23回JAめむろ青年部・女性部海外視察研修に参加させていただくにあたり、JAめむろ並びに芽室町役場や関係各所の皆様にはご理解と多くのご協力をいただき、誠にありがとうございました。

私が海外視察研修に参加させていただいた理由として、ドイツとオランダ



両国が環境保全と高い生産性を両立させた農業を実践し、世界的にも先進的なモデルを構築していることを肌で感じたいと考えたからです。EUの厳しい環境規制の基で農業を発展させてきたドイツは環境政策と農業経営を一体的に進める仕組みが整っていること、国土が狭く資源制約が大きいオランダは限られた条件の中で高付加価値農業を確立しており、今後の日本の農業にとって必要だと考えたからです。

ドイツのCLAAS社・AMAZONE社・GRIMME社での研修では、先進的な農業機械技術とそれを支える考え方を学びました。まず、CLAAS社では大型コンバインを中心に精密農業やICTを活用した収容管理、自動化技術について理解を深めました。次にAMAZONE社では、播種機や施肥機、スプレーヤーの高精度な散布技術、環境負荷低減を意識した設計思想に触れ、持続可能な農業への取り組みを学びました。GRIMME社では、じゃがいもなどの根菜類の収穫、選別機械を通じて、省力化と品質維持を両立させる技術について研修しました。全体を通して、環境ニーズに基づいた機械開発と効率性・環境配慮を同時に追求する姿勢の重要性を学びました。また、環境意識の高い社会背景のもと、有機農業や再生可能エネルギーの導入が進められており、農家は食料生産者であると同時に環境保全の担い手として位置づけられていることについても学ぶことができました。

オランダでの研修では、持続可能で競争力の高い農業の在り方について、現場と研究の両面から学びました。最初にカスタニュホーフエ牧場では、放牧を基本とした飼養管理や牛の健康・福祉を重視した経営手法、環境負荷を抑える飼料設

計やエネルギー活用の工夫について学びました。ワーゲニンゲン大学では、作物生産や土壌管理、病虫害防除、精密農業に関する研究に加え、ユニファームグリーンハウスにおいて実際の栽培試験や環境制御の見学をしました。温度・湿度・光量を細かく制御しながら収量や品質、エネルギー消費を比較検証する取り組みから研究成果を農業現場へ還元する仕組みの重要性を学びました。Solana グループでは、種苗開発から生産者支援までを一体的におこなう体制により、安定生産と品質向上を支える仕組みや種芋の品種を1つ作るために10~15年かかるが、農業政策がよく変わるオランダ政府に対して来年のことしか考えていないという、オランダ農業の内情を教えてくださいました。NAJKでは、若手農業者が主体的に政策提言や情報発信をおこない、農業の将来を切り拓こうとする姿勢について知ることができました。トマトワールドでは、ICTを活用した高度な環境制御技術により、省資源で高収量を実現する施設園芸の最先端を学びました。

今回の研修で得た学びを今後活かすため、環境と調和した農業経営の視点を意識し、日本の地域条件に合った循環型農業や資源活用の導入を考えていきたいと感じました。また、ICTや自動化技術を取り入れ、労働負担の軽減や経営の効率化を図ることで、持続可能な農業経営を目指したいと思いました。さらにオランダの若手農業者のように、農業の魅力や課題を社会に発信し、次世代が農業に希望を持てるような環境づくりをしていきたいと思います。

海外視察研修を終えて

出口 晴基

まず初めに、今回の海外視察研修に際して、JAめむろ並びに芽室町役場、青年部、各関係機関の皆様には多くのご理解とご協力を頂いたことを心から感謝申し上げます。

今回私たちは1月13日～22日の10日間の日程でドイツ・オランダを視察研修して参りました。私が今回海外視察研修に参加した理由として、近年、農機具の価格高騰や近隣農家の離農により、1戸あたりの耕作面積が増えているため、コスト削減や農業技術向上が必要だと考えたからです。また、播種から収穫までの作業において、農業機械の活用方法や海外ではコントラがどのようにおこなわれているのかを知りたいと思いました。そこで欧州の大規模農業に適した農業機械を生産しているメーカーの多いドイツ、先進的な農業システムや気候変動に対応した農業体系のオランダが視察目的に適していると思ったため、今回の海外視察研修に参加しました。



ドイツのCLAAS社、AMAZONE社、GRIMME社の研修で共通して感じたことは、3社ともロボット機械の導入による人件費削減、製品品質の均一化が徹底されており、ドイツの機械メーカーが最も高品質だと謂われている所以を再認識しました。また、生産効率性の追求と同時に環境負荷低減を意識した機械設計とするなど環境配慮への追求もしており、ドイツは環境意識の高い社会であると感じました。

ドイツのCLAAS社、AMAZONE社、GRIMME社の研修で共通して感じたことは、3社ともロボット機械の導入による人件費削減、製品品質の均一化が徹底されており、ドイツの機械メーカーが最も高品質だと謂われている所以を再認識しました。また、生産効率性の追求と同時に環境負荷低減を意識した機械設計とするなど環境配慮への追求もしており、ドイツは環境意識の高い社会であると感じました。

オランダでは、最初にカスタニューホーフエ牧場を視察し、輸入飼料に頼らない地域資源を活かした放牧を基本とするコスト削減や自社で搾乳された乳製品の付加価値創出の取り組みを学びました。次にワーゲニンゲン大学では、持続可能な農業の考え方を学び、温度や湿度などあらゆる気候条件による比較検証研究する現場を見学しました。また、環境負荷軽減の観点から施設内の建物全てに地中熱や地下配管ポンプを利用した帯水層熱交換システムを使用しており、夏は涼しく冬は化石燃料の使用を少しでも減らすことを目指した設計となっており、ドイツと同様に環境意識の高さが印象に残りました。NAJK（オランダ農業青年委員会）では、若手農業者が政策提言や農業の魅力、現場の声を

発信しており、私たち青年部も同じ農業の担い手として農業の将来を切り拓いていく姿勢に刺激を受けるものとなりました。

今回の研修を通じて、今後の農業発展には営農技術の向上だけでなく、政策提言や教育研究機関、消費者との連携が不可欠だと改めて感じました。また、自分の経営を良くすることだけでなく、次世代のことも考えて経営をしていかなければいけないと感じました。今回の研修を活かした農業経営や青年部活動に力を入れていきたいと思います。

海外農業視察研修を終えて

小林 幸星

今回、私たちは1月13日から1月22日の日程でオランダ・ドイツへ海外視察研修に参加させていただきました。私が今回の視察に参加した理由としましては、まず日本とヨーロッパの農業情勢や文化、食の違いについて知識を広げ、これからの営農に活かしていきたいと思ったからです。1月のオランダとドイツには雪はなく、気温も5



～10度程度で気持ちよく過ごせる季節であり、英語を中心にドイツ語、オランダ語が公用語でした。また、同行してくださった3人の通訳の方のお話からもとても勉強になることが多く、バスでの移動中も有意義な時間を過ごすことができました。

まず、最初の2日間でドイツの農機具メーカーであるCLAAS社、AMAZONE社、GRIMME社を訪問させていただきました。

ドイツでは3社訪問させていただきましたが、それぞれ異なる部分や共通している部分が多くどのメーカーも自社で鉄を加工し塗装をしている点は印象的でした。特にGRIMME社では手に職をつけるために年齢や性別に関係なく、未経験者でも3年ほどの育成期間を設け、学校に通いながらも溶接などの金属加工をできるようにするシステムがありました。日本の企業では3か月ほどの研修期間を経て、本格的な作業になると思いますが、ドイツではそういった職人になるための企業が多くあり参考になる部分が多々ありました。

ドイツでの2日間の研修を終えた後、オランダのアムステルダムで4日間の研修と市内観光をしました。オランダの大部分は干拓地であり、海水を汲み出すために使われた水車や干拓後の水位管理に使われた風車が見られ、現在ではアムステルダム郊外の地域で観光用にしないものの、オランダを支える歴史的シンボルが見られたことにとっても感動しました。

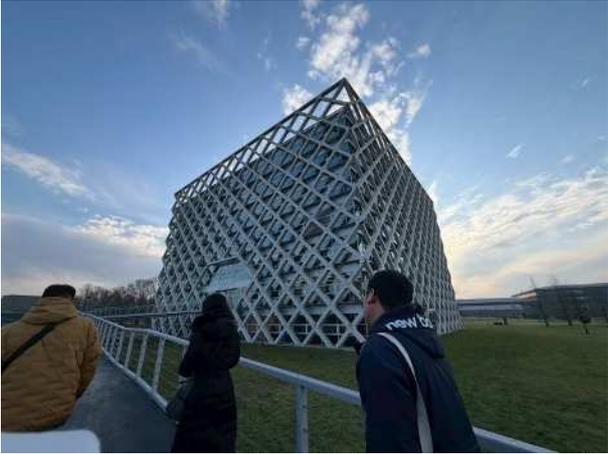
オランダでは世界トップクラスの農業・食・環境分野での研究をおこなっているワーゲニンゲン大学、世界の様々な地域に種芋を供給しているSolana

HOLLAND、NAJK と呼ばれる農業青年委員会、最先端のトマト技術を見て学べる施設であるトマトワールドを視察しました。それぞれの視察先では、共通して様々な企業からスポンサーとして支援を受けているため、最先端の施設が揃っていること、「サステイナブル」を念頭に置いて活動していることが印象的でした。特にワーゲニンゲン大学では天然ガスを使用せずに地中熱や地下の配管やポンプを利用し、温室や大学施設の維持をする供給システムの実験設備があり、環境に配慮した活動を積極的におこなっていることにとっても感銘を受けました。また、他の視察先でもお互いに良い所は共有し、悪い所は協力し合って活動していることは私たちも見習わなければならないと思いました。現代の社会はスマホで様々な情報が手に入る時代ですが、実際に現地に足を運び目で見て学びができたことは、これからの営農や社会で役立つ時が来ると思います。

最後に J A めむろ、芽室町役場を始めとした様々な関係機関の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

旅を終えて











～編集後記～

今回の青年部・女性部海外視察研修は9日間という短い期間ではありましたが、とても実りある楽しいものになりました。欧州の文化に触れるのは初めてであり、様々な人たちが生活している空間は日本ではなかなか味わえない貴重な体験でした。今回の研修で得た経験や知識、考え方は今後私たちが農業を経営していく際に役に立つものになると思います。また、今回の研修で一緒に視察に参加した人たちで今後も交流を続けていき、さらに農業生活を豊かにしていきたいと思っています。

今後、海外視察研修に参加を考えている盟友や参加を迷っている盟友には、今回の私たちの報告を通じて、少しでも参加に興味を持っていただけたら幸いです。なかなか海外の農業を見に行くことはできないと思うので、タイミングが合えばぜひ参加して、知識、経験を深めていただければと思います。

この報告書を作成するにあたり、研修に参加された団員の皆様、および事務局の方々には大変お世話になりました。1月の帰国ということもあり、忙しい時期にも関わらず、多数の手助けをいただき誠にありがとうございます。そして、今回の海外視察研修をおこなうにあたり、JAめむろをはじめ、青年部・女性部、農協観光や現地ガイドの方々など多くの関係機関様にご協力いただいたことをこの場をお借りしてお礼申し上げます。この度は本当にありがとうございました。

以上を持ちまして、海外視察研修の報告とさせていただきます。

